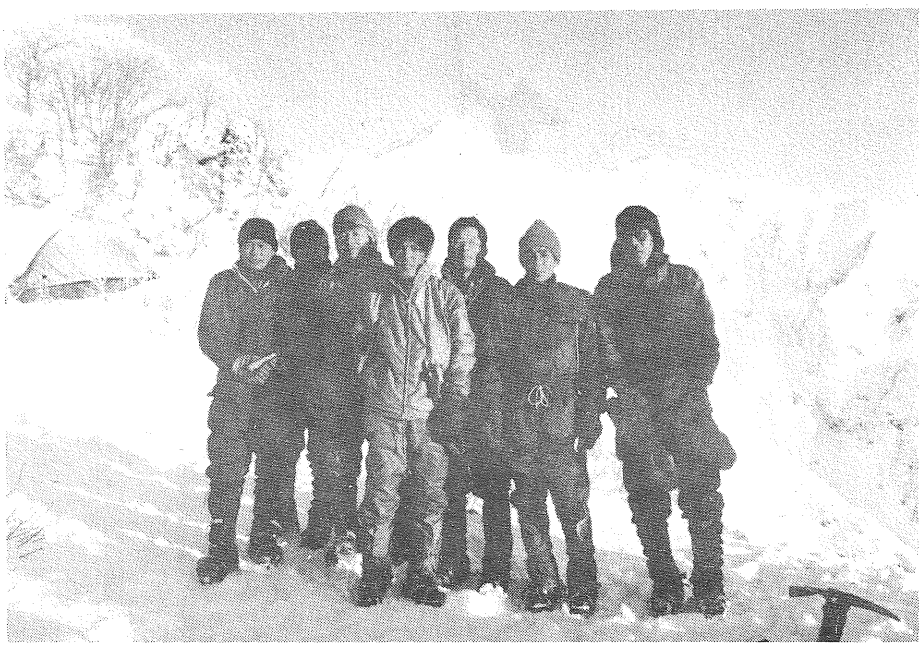
会　報

1980

No.10



１９８０年１月１日　冷池にて

KAC

神戸山岳会

目　次

昭和55年度冬山合宿計画 ---------- 2
A班行動記録 ---------- 3
鹿島に登って ---------- 星野辰也 3
冬山合宿 ---------- 小林利樹 3
冬山合宿 ---------- 神田章吉 5
B班行動記録 ---------- 7
冬山合宿 ---------- 矢木研三 7
赤岩尾根―鹿島槍ヶ岳―爺ヶ岳東尾根 ---- 山本泰彦 9
冬山合宿 ---------- 山内敏史 11
昭和54年度個人山行 ---------- 13
初冬の槍ヶ岳（11月） ---------- 山本泰彦 13
北ア.不帰嶮二峰東壁阪大ルート登攀（11月）- 神田章吉 14
昭和55年度個人山行 ---------- 17
雨飾山（1月） ---------- 山本泰彦 17
五竜遠見尾根（1月） ---------- 小林利樹 18
（2月） ---------- 小林利樹 19
八ヶ岳.阿弥陀南稜（3月） ---------- 山本泰彦 20
八ヶ岳.阿弥陀南稜（3月） ---------- 堀田　久 21
槍ヶ岳.北鎌尾根及び小槍（5月） ---------- 山本泰彦 23
続.但馬の山々 ---------- 26
高畑山（1月） ---------- 山本泰彦 26
東山（1月） ---------- 山本泰彦 27
赤谷の頭～三室山（3月） ---------- 山本泰彦 29
朝来山～青倉山（3月） ---------- 山本泰彦 31

昭和55年度冬山合宿報告

序　文

星野　辰也

今年度の冬山合宿は鹿島槍を中心にそれぞれの力量に応じてパーティーを2分して合宿を行なうこととなった。パーティーの2分割には賛否両論があったが、現状の会の情況を考えるならば、今回の計画案がBestのものと考えられる。昭和52年の正月に天狗尾根では多数の遭難が発生し、我々も鹿島槍の登頂を断念せざるを得なかった。しかし今回は異常とも思える暖冬で積雪量は昭和52年の1/3程度というものの、無事今回の山行を終えることが出来たのでここに報告致します。

合宿計画

参加者、A班　星野(CL)，神田(SL，記録)，川辺(食料)、小林(装備、気象)

B班　矢木(CL)．山本(SL，装備)，山内(食料)．岸本(O.B)

目　的、A班　中堅の雪上技術の向上．

B班

期　間、12月29日～1月4日（内3日間予備日）

行動予定

12月29日　A班　大阪発(ちくま3号)

B班　〃

12月30日　A班　大町駅―鹿島部落―荒沢出合―天狗尾根―天狗の鼻

B班　大町駅―大谷原―西俣出合―高千穂平

12月31日　A班　天狗の鼻―荒沢の頭―鹿島槍ヶ岳―冷池山荘

B班　高千穂平―冷池山荘―鹿島槍ヶ岳―冷池山荘

1月1日　A.B班　冷池山荘―爺ヶ岳―爺ヶ岳東尾根―

鹿島部落 ― 大町駅

1月2日
1月3日
1月4日
} 予備日

A班行動記録

鹿島槍に登って

星野 辰也

今回の冬山合宿のスタートは非常に悪かったと思う。11月までは会としての活動よりむしろ個人的活動が目立ち、このままではパーティーのまとまりを考えるならば冬山合宿ははたして可能かどうか疑問であった。

しかし小数のパーティーならば十分まとめられると考え、いささか不安ではあったがリーダーとして合宿を遂行することとした。今回の合宿を無事終えることが出来たのは、小数パーティーであり、まとまりやすかったことと、又メンバーの力量が比較的そろっていた事、それに天候に恵まれたという事にあると思う。暖冬とはいえ、天狗の鼻より鹿島槍までは天候も悪く、冬山の総合的な能力が要求されるルートであった。一つの峰を登り終え、冷池の幕営地に憩う時、対面する白銀の剣岳を見るに新らたなる山行プランが、湧きあがってくるのを感じる。山ヤとは、山に登って次の山を思う人の事であり、これがすなわち山岳会の現役といえるのではないか?

今回の山行は全日程を3日間で終え、いささかあっけなかったが、しかしながら今回の山行は各メンバー一人一人の確実なstepとなったものと思う。

冬山合宿

小林 利樹

12月30日、KACへ入って初めての冬山合宿に参加することになり鹿島槍天狗尾根から爺ヶ岳東尾根縦走となった。信濃大町に降り立ち、さっそくタクシーで大谷原へと向う。いつになく雪も少なく少々あっけにとられるが、気をひきしめていかなければ事故のもとである。ここで赤岩尾根へ行く一行と別れて、我々4人は一路、大川沢を行く。例年ならばずっと大川沢を行くのだけども雪も少なく夏道(?)を行く。荒沢出合からは雪も少し増したが、対岸にうつるのにこう沢が全部雪でうまっていないのではまってし

まうと　ここから引き返さなければならないので　慎重にならざるをえない。水浴をするには　時期がまだ早いようだ。200m位行くと右から降りてきている小尾根に取り付く。ここは　ただひたすらに急降面をあえぎながら登る。トレースが　ついているので　割合時間がかせげる。ラッセルをしない冬山も　ひさしぶりである。1800m台地といわれる所は　思った程広くはないが、キャンプサイトとしては　よい場所のようである。しかし、ここからは以外と　いままでの様相をかえてきて、やせたリッジとなっている曲り沢側へスリップしたらアウトかもしれない所である。第1クローワールは僕の知らないうちに過ぎていた。少しいくと第2クローワールである。クローワールの中間付近に大きな木があるが、星野氏が行った時は手がとどく所にあったらしいが、僕らがいった時は、はるか上の方であった。これだけ雪が少ないのだなあと思いつつ気を引きしめて行く。ここは、ブルジョア山岳会(?)がはったフィックスがあった。これをたよりに登って行く。このクローワールは傾斜がきついので雪が不安定であれば雪質判断に迷う所であろう。

ここをこえて　まもなく天狗の鼻の広い台地上のピークにつき、テントを張る。ここから見る鹿島北壁は屹立としてそびえたっている。これが数多くの岳人の憧れである。

12月31日、今日は朝から　どんよりとした天気であり今にも　くずれそうである。急な、やせた尾根を登っていくと　まさしく名のように小舎岩である所につき左側からまいて行く。この小舎岩の少し前から風雪強く、視界もわるくなってくる。この上の岩場を直登していくと　また岩場があるが、右の雪壁を登って行くと荒沢の頭に着く。ここで東尾根と合流している。

急登をすると北峰であるが、視界がわるいので前が　みえない。昂尾根は案外広いらしく　コルに一張りのテントがあった。神田氏の巧みなルートファインデングによって南峰につく。風雪強し。

冷池小屋をめざして急ぎ足で行く。小屋の横にKACのテントがあり　大谷原で別れた一向と会う。岸本さんの第一声「酒ないか!!」これには　びっくりした。

1月1日、今日は元旦である。正月にふさわしく快晴である。御来迎をながめ、今年もいい年でありますようにと、ここから全員で爺ヶ岳東尾根を行く。ここも雪が少なく、リッジになっている所が少ないので気楽に行ける。

ここもバカ尾根らしく非常に長い尾根である。下山して　狩野さんの所によって、野沢菜を食べる。お茶が大変うまかった。「ああ、これで合宿も終わったのかな。」と思いつつ車中の人となった。すべて順調にいった合宿であ

り、よきリーダーに感謝したい。

冬合宿

神田　章吉

1/30　8:00 大谷原　9:40 とりつき　14:00 天狗の鼻

今年は、雪が少ない。大谷原まで、雪らしいものは、全々見あたらない。ここで、赤岩尾根のパーティーと分かれて 林道をたどる。つり橋をわたり、ダムに出る。1ヶ所右岸をまき、渡渉を2回ほど行なう。とりつき。雪は、あまりなく、下の土が見えているところもある。急登が終わると、ジグザグ道。落ち葉さえある。そして、天気がいいせいか、とにかく暑い。稜線に登りつき　尾根をたどる。アイゼンをつける。才1、才2クーロアールとも、フィックスザイルがある。雪のつき方は、不安定で、草つきがのぞく。

全員、フィックスザイルにカラビナをかけていく。最後の少しナイフリッジになったところをつめていくと、天狗の鼻に出た。2はりほど、天張がある。我々は、ブロックの跡があるところで、のこぎりでブロックを切り出し、補強して、テントをはる。鹿島の北壁、荒沢奥壁がよく見える。

1/31（晴れのちガス、強風雪）3:00起床、6:00出発、7:30小舎岩、10:50北峰、12:15南峰、13:40冷池小屋

5:00ごろ用意ができるが、稜線が細いので、もう少し明るくなってから行くことにし、時間待ち。星は、まだ出ていて、キラめく。ただ西の方に雲が出てきているのが気になる。6:00少し明るくなってきたので、ヘッドランプの明りをたよりに出発。神田一小林、川辺一星野の順で、ザイルをつける。

ナイフリッジした稜線をたどる。トレールは、ほぼ消えている。アイゼンでステップを切っていく。しだいに、ガスり出し、風強くなる。地吹雪。

小舎岩あたりでは、雪がふり出し、風雪となる。4人、ザイルで、じゅずつなぎとする。（小舎岩は、遠くから見ると、本当に、小屋のようだ。）

小舎岩は、左側をまき、次の岩峰は、右のルンゼをつめる。雪壁となっている。（フィックスザイルアリ）。そこから左へトラバース。5～6mの外傾した岩壁を攀じる。一番、登りやすそうなところを登ると、やはり、ハーケンが一本、バシっと、打ってあった。ランニングビレイをし、上のハイ松のみきを、ガバっともって乗っこす。荷で後ろに引かれて、苦しい。

ここより稜線は、ますます細くなり、ガスっていることもあって、空と稜線の見分けがつかない。じっと目をこらしていると、少しその堺がみえ、そ

のすきに、ささささと動く。これをくり返す。東尾根と合するあたりより傾斜がゆるくなる。ピストンに行った他のパーティーと会う。(東尾根，ジャンクションピークより)。北峰にでると、強風雪の洗礼を受ける。下りは、わかりにくい。つり尾根は、少しだだっ広いところもあり、ガス、強風のため、全々見えず方向がわからぬ。磁石をたよりに行く。まともに前から風雪がふきあげてくるため、目をあけていられない。とても、いたい。南峰ののぼりは、ペンキが、ところどころ出る。南峰より、牛首尾根に気をつけながら下る。人が、たくさんいる。快調にとばす。トレースが、はっきりしているし、ラッセルをしなくてすむのが、ありがたい。冷池小屋のサイト場には、赤岩尾根パーティーのテントがある。コーヒーをいただく。とってもうまい。(お返しに、ウイスキーをさし出す)。風は、ここでは、弱い。雪は、しんしんとふりつもる。横にテントをはり、どんどんブスをたく。紅白歌合戦を聞きながら、しらずしらずのうちに、ねむりについていた。

1/1(快晴)

前線が通過したあと、弱い冬型になると思っていたが、何と快晴。全員8人で爺ヶ岳越えとなる。下層雲海、風は冷たい。爺ヶ岳本峰より、急登を下る。東尾根は、入山するパーティーも多く、トレースも、しっかりついていて、いい。心配していたナイフリッジも雪も少ないこともあって、難なく通過。あとは下るのみ。雪が少なくなり、最後の急登は、アイゼンに、落ち葉とドロをつけながら下る。アイゼンなしでは、ドロの急な下りは、無理だろう。アイゼンさまさまだ。狩野宅で、お茶をよばれ、マイクロバスで大町へ。大町で、メシを食おうと思うが、元旦なので店があいていず、しかたなしに、契茶店でトースト、味けない昼食でありました。大町の駅で、岸本、山本、川辺、山内の4氏は、雨飾山へと向う。星野氏は、いなかへ。矢木、小林、神田の3氏は、帰神。さんな早く家に帰るのは、めずらしいことです。

正月は、ゆっくり家で、すごしましょう。

B班行動記録

冬山合宿

矢木 研三

昭和54年12月29日～55年1月1日

メンバー：矢木、山本、山内、岸本

12月29日　冬山合宿参加メンバー8人全員の顔がそろったのは夜の9時頃であった。A班の4人は、天狗尾根から鹿島槍、そして爺が岳のルート、B班の4人は赤岩尾根から鹿島槍：そして爺が岳のルートを計画している。

私はB班に参加をきめた時から、出発の今日迄、「はたして、自分の体力でメンバーの1人として他の3人と同様に、やってゆけるだろうかと少々不安であったが、それも〝ちくま5号〟に乗り込んだ時には、どこかに消えていた。

12月30日　松本で普通列車に乗りかえて、信濃大町で下車、マイクロバスで大谷原に向う。天気は快晴、雪積は大谷原で5センチ、8時過には身じたくも終わり、出発する。A班とは、大冷沢左岸への橋を渡った地点で分れる。ワンピッチ程歩いた所であまりの好天に皆が着衣をへらす。西俣出合に着いたのが9時頃、此処で私はオーバーシューズをつけたものの、赤岩尾根の登りは急で、スリップしそうで、登り出してしばらくして、せっかくつけたオーバーシューズをぬぐはめになる。雪積は此処でも少なく、夏道通しのトレールで一度もラッセルする事なく12時頃、高千穂平に着く。白く輝く鹿島槍の双耳峰を目前にした時の感激は、これから先いつまでも忘れる事は無いであろう。予定通り今日の行動は此処で切り上げる事にして、幕営の準備にかかる。日が落ちて空に星が輝き、月光の中に鹿島槍の勇姿が白く浮び上がる様になっても、いっこうに外気の温度は下る様すもなく、4人で一杯の天幕の中は暖かくて冬とは思えない。明日の気床を2時半と定めてシュラーフにもぐり込む。

12月31日、6時出発、我々の前にも後にも、ヘッドランプの光が幾つもゆれている。急な雪道をトレースして冷池山荘のテントサイトに着いたのが8時少し前、荷を山荘ののき下にデポすると、鹿島槍南峰へ向け出発する。

森林限界を抜けると稜線上は風も強く、視界もかなり悪い。昨日取った天気図上の前線がかなり近づいている様だ。布引山を越えて鹿島槍南峰への最後の登り近くで風はますますはげしくなる。北の強風をついて南峰に立った時、今迄に味わった事のない感情が私の胸の中に広がっていった。

山頂には2パーティーの先着者が居る。一方は男性で他方は女性の6人パーティー、山本氏のカメラで記念写真を撮ると、ただちに下山を開始する。

12時少し前に冷池のデポ地点に帰り着く。避難小屋で少しの間休んでから、テントを設営する。午後2時近くテントをゆする音に外を見ると、天狗尾根から鹿島槍に立ったA班の4人がザイルに連なっている。此の頃から天候はますます悪くなって、雪も降り出す。昨日の夜のメニューは御飯にクリームシチューとキムチ、今朝は米の赤飯にみそ汁、そして今夜はブタ汁の予定であるが、その前に時間をかけてお好み焼を作る。此の作業は天幕の中での時間つぶしに最適と思われる。お好み焼をさかなにA班が天狗尾根経由でくれたウィスキーを飲んで、語り合う。気象通報は日本列島の日本海側に北から南に長く伸びた寒冷前線を示している。3時間前のものとすれば明日の午前中には東海上に通過しているものと推測される。明朝は5時起床と定めるとシュラフにもぐり込む。

1月1日、1時間早く4時起床、食事を終えて外へ出ると入山日と同様、良く晴れ渡って昨日の悪天がうその様である。昨夜の内に20センチ程の雪積がある。出発準備を終えるとA班B班合同で鹿島槍をバックに記念写真を撮る。8時出発、爺の主峰への登りは急で、風も強く少々緊張する。10時20分主峰着、此処からの降りの急斜面で私を含むB班の三名は星野氏とアンザイレンして降る。東尾根を降る途中でトレールをはずして腰迄雪にうまってしまいもとのトレールにもどる迄にかなり苦労する。今回の山行は雪積量が少なく、トレールもしっかりしており、一度もラッセルする期会がなかったが、トレールを一寸はずれただけであれだけ苦労させられるものとすれば、ラッセルがあったら大変な難渋をしたにちがいない。2000m地点から標高が低くなるにつれて、雲におおわれて天候は悪く、2000m地点から上の晴天が信じられぬ程で、現に2000m地点で幕営中のパーティーが「天候が悪いので今日は現地点に滞在して天気図を取って、それによって明日の行動を決定したい。」といった内容をBCとトランシーバーで交信しているのを聞いた。

雪が消えたあたりからの鹿島部落迄の下降路は急でウンザリする程ひどいものであった。午後一時過ぎに鹿島山荘に着く。電話でマイクロバスを呼んでもらい、それが当着する迄の半時間程を茶をよばれ、登山記念帳など一記帳して過す。

今回のB班による合宿は、一つのパーティーの能力と天候の条件とをルートにマッチさせる事が登山技術の最も大切な点であるとすれば、絵に書いた様に計画通りに事がはこび成功といえよう、しかし詳細に分析し検討して

みる時それが、多分にラッキーであったと思われる。一度もラッセルを強られる事が無かった事、冬山と思えぬ暖かさに終始した事、山行計画へ影響をきたす様な悪天に見舞われなかった事以上の三点から考察して先ず体力トレーニングの問題、次に幕営技術の未熟さ、そして必要物資の欠員等、自然条件が悪化していれば、なんらかの問題を生じていたかも知れないのである。

次回からの山行にこれらの事をよりよく生かしてゆきたいと思っている。

赤岩尾根—鹿島槍ヶ岳—爺ヶ岳東尾根

山本　泰彦

昭和54年12月30～昭和55年1月1日

メンバー：矢木(CL)，山本(SL,装備)，山内(食料)，岸本(O.B)

異常な暖冬と好天に恵れ、良き先輩の指導のお蔭で、冬山の入門コースを楽しく歩き、愉快に飲み、山登りの良さを満喫できた。以下はその記録，感想である。

12月30日（晴）大阪（前夜22:20）——松本——大町(7:04)——大谷原(8:05)——西俣出合(9:05～9:30)——昼食（11:00～11:30）——高千穂平(12:10)

マイクロバスは、鹿島部落を過ぎ大谷原まで入る。以前、岸本さんがこられた時は胸までのラッセルだったという大冷沢は踝(くるぶし)までしか雪がない。林道を楽々とたどり、西俣出合に着く。西沢の奥に爺ヶ岳が白銀に輝いている。雪は予想以上に少なくハシゴがでており、トレールは夏道通りジグザグについている。あまり暑いので着ているものを一枚また一枚と脱いで最後にはシャツ一枚となる。樹林帯故か風もなくまるで春山のようである。今日は高千穂平泊りなので のんびり歩く。東尾根や冷尾根と高さを競いながらどんどん高度を稼ぐ。昼食をとっていると遠見尾根から縦走してこられた神戸市役所の吉田氏一行のパーティと出会う。昼食後、一ピッチで高千穂平に飛びだす。北股本谷をへだてて、雪煙をあげている鹿島槍ヶ岳の双耳峰が視界に飛びこんでくる。東尾根の第1岩峰、第2岩峰が指呼できる。

天然の雪洞を利用したキジ場を造営した後、テントのなかで神戸アルコールクラブの宴が始まる。岸本OB特製のキムチとニンニクの鰹節あえは絶品であり、オンザロックと共に胃に吸いこまれていく。

12月31日（曇のち吹雪）高千穂平(6:00)——雪壁（取付7:05，終了7:35）——冷池山荘（7:55～8:15）——鹿島槍ヶ岳（10:15～10:30）——冷池小屋(11:

高千穂平上部で朝焼の彼方に富士山を見る。嫌な予感がする。

赤岩尾根の最後は、夏道のようにトラバースせず そのまま雪壁を100mほど直登すると、主稜線(2488m独標)に飛び出す。期待した剣岳の展望のかわりに、黒部側からの烈風に見舞れる。朝焼の効果か？ すでに吹雪である。冷池小屋の前で間食し、ザックをおいて 空身で鹿島槍ヶ岳を目指す。

森林限界を過ぎると、再び黒部側から 雪まじりの強風に襲われる。布引山を通過する頃からは、ピッケルを突き差した防風姿勢を時々余儀なくされる。視界悪く約5～10m。途中で引返すパーティもある。山本が調子悪く少し遅れる。鹿島槍頂上は、夏と同じで三角点が 露出している。

頂上には、6人の女性パーティが、ツエルトを被って 頑張っている。山を志す女性は これぐらいの気魄が 必要である。風雪強く 視界も悪いので 記念撮影をして 早々に往路を引返す。冷池山荘の避難小屋で一服していると 先刻の女性パーティが入ってくる。岸本さんが 煙草をサービスすると、お返しにウィスキーボンボンをいただく。京都の社会人だそうで、6人とも 相当美人である。

冷池小屋前に設営し、お茶を沸していると テントをたたく者がいる。

A班が到着したのである。A班よりウィスキーの差入れをしてもらい 八木コック長特製のお好み焼を肴にしてKACの宴は、僕の誕生日パーティも兼ね、今日もまた盛大に開始される。

1月1日(晴のち曇) 冷池小屋(8:00)——爺ヶ岳(9:10～9:20)——休憩(9:30～9:50)——東尾根1,766.9m三角点(11:00)——鹿島部落(13:00)——信濃大町

昨日の吹雪が嘘のよう、初日が 鹿島槍の双耳峰を薄桃色に染め 1980年は始まった。全員鹿島槍を背景に記念写真をとる。本日はA, B班一緒になって行動する。爺ヶ岳の肩にかかると 黒部川を隔てて 毛勝山、剣岳、立山の立山連峰が白い屏風をみせている。特に剣岳は、迫力がある。『彼女と一緒にみたかった。』という"X"氏。理解できるよ！その気持。

爺ヶ岳本峰(2669.8m)から東尾根に入り 少し下った所で一本たてる。

風もあまりなく小春日和といったところ。北には 火打山、妙高山、高妻山、南には 槍ヶ岳も望見される。2390m付近で 白沢天狗尾根と別れ、左へ急降下して 東尾根に入る。2,198m独標手前は 積雪がもう少しあれば ナイフエッジになるだろう。ここを過ぎると シラビソの樹林帯に入り、

1本たてる。不思議なことに2000m以下になると　雲の中にはいったのか小雪がちらちら降り始める。1766.9m三角点で右手に折れ　矢沢に沿った尾根を行くようになる。この付近から　積雪が少なくなり、木の根がみえ始め、アイゼンをひっかける者もでる始末。1430mより左に折れ、鹿島部落目指して支尾根を一気に下ろうとするが、径は地肌が現われ　アイゼンに落葉が団子状に付き　なんとなく疲れる感じである。急なジグザグ道をなかばヤケクソで下り着いた所が　砂防堰堤の下の林道終点。そこから200mほどで鹿島山荘の狩野さん宅に着き、下山届を済ませる。美味な野沢菜と湯茶の接待を受ける。

参考文献　山と渓谷 1973年3月号

冬山合宿

山内 教史

1月30日、高千穂平から見た鹿島槍ヶ岳は大きく、そして美しかった。今まで見た山とは違っていた。何かが違っていた。そうである、ここから見える峰々は、北アルプス3000メートルの山々だ。「ウワーッ」という感じが第1印象であった。僕がKACの合宿に参加したのが今回が初めてであった。

高千穂平までの長い急な登り坂も、雪の上でテントを張るのも、そしてその上で寝るのも、とにかく何もかも初めてずくめでした。そしてテントの中でのウイスキーは　また格別で、雪で割ったウイスキーは少し甘く　下界のそれとは全くちがっていた。酒を飲みながら僕が思ったことは、僕がこの神戸山岳会に入るまでは、一人で故郷の多紀アルプスや六甲を登ることしか知らなかった僕は、みんなでテントの中での酒盛りが　こんなに楽しいことを初めて知り、ほろ酔い気分でシュラーフにもぐりこんだ時は、いつの間にか眠っていました。

1月31日、さあ、いよいよ頂上アタックである。
とにかく　稜線に出て一番ビックリしたのが風でした。本当に息もできないぐらいで、こんな風を経験したのは　初めてで一歩動けば吹き飛ばされそうでした。どうにかこうにか登った鹿島槍の頂上は　強風と吹雪の世界で　感激する余裕も無くただ、これが冬山だなあと思うことが精一ぱいでした。

そして、1月1日、支離滅裂でしだが、無事、鹿島部落まで下山し、初めての合宿を終えることができましたが、今回の合宿で想ったことは、自分で考えていた北アルプスの冬山のイメージとは大きく違うということでした。

そしてリーダーの矢木さんや岸本さん・山本さんに登山技術においても、テント生活の面でも いろいろ助けてもらい、まだまだ自分自身「山」について学ばなければいけないと思いました。僕は新人で、今回が初めての冬山合宿でしたが、新人でも新人なりにやらなければならないことができず、食料係である僕でしたが、係として何もできず、味付けなどは全て矢木さんにやってもらうという有様でした。（僕が味付けをしたらまずくて食べられなかったかも知れませんが……）こういうようなことで反省すべき点は他にも沢山ありますが、冬山での技術、テント生活の経験など今回の合宿で得たものも沢山ありました。そして、これからも今回の冬山合宿での反省点、得た経験などを忘れずにがんばっていきたいと思っています。

昭和54年度個人山行

初冬の槍ヶ岳

山本 泰彦

昭和54年11月23日～25日

メンバー：小林，山本

11月23日（小雨）大阪（前夜22:10）――富山（4:16～4:53）――神岡(6:15～6:20)――新穂高温泉（7:30～8:35）――穂高平避難小屋（9:20）

神岡駅で土砂降りの雨に見舞れ，不吉な予感がする。新穂高温泉のバス停で雨宿りをし、小降りになったので歩き始める。雨は強くなったり、弱くなったりでいっこうにあがる気配もない。雨具を忘れた者がいたので早々に沈澱にする。

11月24日（晴のち曇）穂高平(4:55)――白出沢出合（5:30）――滝谷出合（7:00～7:10）――槍平（8:00～8:10）――槍ヶ岳山荘（12:30～14:00）――槍平(15:10～15:25)――滝谷出合(15:55)――白出沢出合(16:50)――穂高平（17:15）

昨日沈澱したため，槍ヶ岳～笠ヶ岳縦走を断念し，槍ヶ岳往復に変更する。しかし、初冬の山であるので全装備を持っていくことにし、早朝ヘッドランプをつけ出発する。白出沢までは担々とした林道である。そこからは岩だらけの径となる。昨日の雨が氷化し，うすく岩にはりついており、足許に神経を使う。チビ谷出合付近で明るくなり、錫杖岳が朝日に映えているのが望まれる。滝谷出合で，滝谷の展望が拡ける。なかでも滝谷ドームが雪煙につつまれながら，その特徴ある姿をはるか頭上にみせているのが印象的である。径は樹林の中に入るが，槍平の河原から，再び滝谷を見ることができる。雪をかぶった岩場は凄味があり、表現しがたい魅力を感じる。

槍平を過ぎると登山道も雪におおわれ歩き易くなる。槍平から2ピッチ目，大木のあるテラスは良き憩場である。抜戸岳の左肩に笠ヶ岳が見え始める。奥丸山の左遠くに乗鞍岳がゆったりした山容をみせている。この先で夏道は飛騨沢にはいるのでこれを避け、沢の右手の支稜を直登する。傾斜もきつくなり、雪もクラストしてきたのでアイゼンをつける。槍ヶ岳山荘が目前に

なってから遅々として進まず．飛騨乗越までが永く感じられる。

飛騨乗越に着くと、とたんに強風に見舞れる。常念岳が美しい三角錐をみせている。槍ヶ岳山荘はＮＨＫの取材班が占拠しており　正月放送用にカメラをまわしている。僕達も写ったかな？　槍の穂先は蒼氷が着き、コバルトブルーの吸いこまれそうな空に浮き出ている。小林君が槍頂上を往復する間、日向ぼっこをする。カッティングされた氷片が２回ほどバウンドし、四散して槍沢に落ちていく。人間も落ちれば氷片と同じ運命をたどるのだろう。頂上手前は、かなり渋そうで　先行パーティは20分ぐらい蝉になったままである。北穂高が良くみえているのに反して、薬師岳方面は雲にどんどんおおわれ始める。帰路は雪崩の心配もないので　飛騨沢を下る。登りの苦労が嘘のよう、あっという間に槍平に着く。そのまま歩いて穂高平にはあたりが薄暗くなる頃に着く。

11月25日（小雨）　穂高平（6:30）――新穂高温泉（7:00～7:40）――神岡――猪谷――富山――神戸

夜半から小雨になる。女心と秋の空は変り易い。早朝のバスに乗るも、接続悪く　夕方に神戸に着く。

３日間のうち実稼動１日という能率の悪い、逆にいえば優雅な山行であり、僕が山登りのまねごとを始めてから１５年になるが　こんな経験は初めてである。仕事の疲れを山でとるのも時には　いいものであるのかなあ？

ともあれ　北アルプスのポピュラーコース，立派な指導標ばかりが目についた。

北ア．不帰嶮二峰東壁 阪大ルート登攀

期間　S54、11.22～25　　神田　章吉

メンバー　植原、神田

日程　11/22　大阪 ▬▬

11/23　▬▬ 白馬＝二股―― 南股取水口 ⛷

11/24　⛷――（唐松沢）―とりつき

11/25　⛷――（二峰東壁阪大ルート）――二峰サウスピーク――唐松岳――（八方尾根）――白馬＝帰神

ルート状況：　ルート自体は、むずかしいところは、これといってなく、スリップさえしなければ、別に問題はないと思われる。

それより、アプローチに苦労させられた。特に、南滝が、いやらしかった。

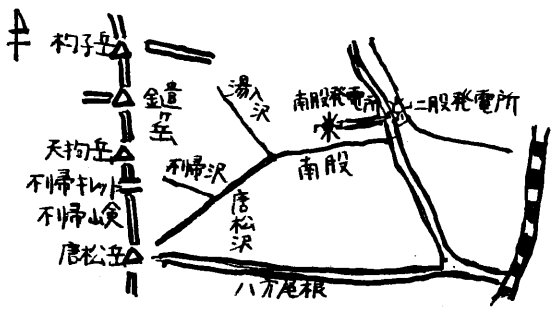
非常にビビル。奥の二俣ぐらいから、完全な雪渓となる。デブリの上が歩きやすい。(他のところは非常にもぐる.)ラッセルをかさねて、一二峰間ルンゼをさす(ここは、よくわかる。)以後、中央リッジをみつけようと思いつつ歩くが、はっきりわからぬ。雪渓の中の急斜面にたそがれが、せまってきたので、バケツをほり、スペースをつくって清やんと2人ツェルトをかぶる。

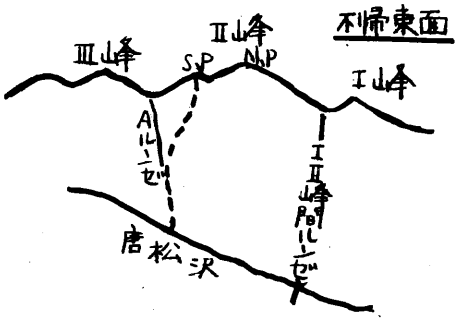
2人とも、くつ下が、カチンカチンだ。星が、冷たくまたたく。清やんのウドンに舌づつみ。あすはどうも、天気が、くずれそうなので、最初の目的は二峰中央リッジであったが、10時間ほどかかりそうなので、二峰阪大ルートに予定を変更することにしようということになる。

11/25(日)(晴れのちガス) 6:00出発 8:00二峰阪大ルートとりつき 11:00二峰の頭

唐松沢をつめていく。しだいに急傾斜となる。Aルンゼに入り、右からくる2本目のルンゼが、とりつき。清やんとツルベ。1P目、5メートルほど垂壁となっており、アイスハーケンをねじこみ、ランニングビレイにする。(氷の状態がもろくて、悪い.)ピッケルでステップを切り、バイルとのコンビネーションで登る。上で、ロックハーケンを1本打ち、トラバース。

雪が不安定で、足場がくずれる。2P目、雪壁。清やん左にトラバースしていく。3P目、雪壁、リッジに出る。4P目、リッジをつめる。5P目、雪壁、6P目、岩稜帯、ベルグラがはり、いやなところである。7P目、15mほどで二峰サウスピークの頭に出る。1P目以外のところは、これといってむずかしいところは、ありませんでした。(アプローチの方がむずかしい)。2年前の冬、ここでビバーグした時のことが頭をよぎっていく。唐松岳まで、消えかかったトレースをたどる。(冬、ここのあたりでまよったことが、うそみたいだ.)唐松小屋のところから八方尾根を下る。下り口が少しいやらしく、切れ落ちている。オ三ケルンあたりでは、もう雪は、ほとんどなし。リフト駅で、清やんと成功を祝して、ビールでかんぱい!!





〈記録〉

11/23（金）（小雨）7:50二股　10:15南股取水口

白馬駅で神鋼の山岳部の顔見知りと会う。メシを食って、タクシーで二股まで。そこから小雨の中を、かっぱをきて歩き出す。取水口のダムのところに、ちょうど、6畳ほどの広さのコンクリートの室があったので、雨やどりして、ウィスキーを、ちびりちびりとやっていた。雨はやみそうもないし、ツエルトしかもってないので、きょうは、ここで、とまろうということになる。そうなると、本格的に飲み出し、2人でウィスキーを1本あけてしまう。清やんが夜中、アゲまくって、大へんであった。ガスがかかって、寒い夜だった。

11/24（土）（ガスのち晴れ）3:30起床　5:00出発　10:00南滝　12:10奥の二俣　17:00とりつき

朝、雨はやんだが、ガスがかかっている。暗いうちから歩き出すが、川原が広く迷う。もう少しで烏帽子沢に入ってしまうところであった。（磁石を、忘れました。）　しだいに晴れ間見えます。以後、渡渉の連続で、なかなかはかどらない。岩がぬれているし……。わたりやすそうなところを見つけようと思うが、なかなか見つからない。そうこうしているうちに、しだいに雪が出てくる。お手々がチベたい。二人とも、すべってよくはまる。清やんは一度、全身はまり、メガネを流してしまう。以後、メガネナシ。2人とも下半身、ずぶヌレ。南滝は、完全に、ツルツルのスラブで30m。左側をまく。岩がぬれているし、草つきで悪い。ザイルを出す。荷をおいて登る。

右にトラバースしていく。雪がついていて、足場が悪い。滝の上で、清やんをジッヘル。トラバースしているので、落ちたら、もろにふられる。

清やんが登ってきてから、もう一度荷をとりにおりる。トラバースするのは、いやなので、滝を、清やんに確保してもらいながら、降りようと思い、半分ほどいくが、ぬれてツルツルで登り直すことなど不可能だとわかり、ザイルをつかんで必死に登り直す。トラバースして、クライムダウン。滝の上に登りついてから、2人で、ぬれたくつ下をしぼり、スパッツ、ヤッケ、オーバーズボン、アイゼンをつける。とっても寒い。再び渡渉したり、まいたり----、でも沢での渡渉には、アイゼンが非常に有効であることがわかった。すべらないし、ゲタの役目をして、流れの中も歩けるものね。一ヶ所、岩の間のぬけ穴みたいなところを通る。ハーケンあり、古いフィックスザイルがある。荷がひっかかって通りにくい。途中の小さな滝で、非常なバランスクライムとなる。アイゼンのツアッケの先がやっとひっかかるぐらい。

昭和55年度個人山行

雨飾山（1,963.2m）

山本　泰彦

昭和55年1月1日 ～ 1月3日
メンバー：岸本、川辺、山内、山本
1月1日（曇）　信濃大町――南小谷――小谷温泉・雨飾荘――水源（揚水場）
冬山合宿が好天に恵まれ、沈殿することなく終了したので元旦に下山した。このまま帰神するのももったいない話なので、温泉にでも入ろうかということで、雨飾山へ行くことに話がまとまった。南小谷駅でタクシーを待ったが　なんせ元旦のこと1時間ほど待ってやっと乗車できた。
鹿島部落には雪がなかったので、たかをくくっていたら自然休養村雨飾山荘の前で積雲のため通行不能でタクシー下車（3,700円）のはめとなる。
夕暮の林道を30分ほど歩いて　水源地らしき建物の横で幕営する。

1月2日（高曇）　幕営地（7:30）――鎌池分岐（7:50）――登山口（8:05～8:15）――荒菅沢（10:10）――雨飾山,（12:05～12:15）――荒菅沢（13:15～13:40）――登山口（15:00）――幕営地（15:30～16:00）――小谷温泉（16:30）
林道が大海川に沿うようになると前方に岩峰の雨飾山がみえてくる。
登山口で右手に下り、大海川の枝沢を渡り　川原を10分歩く。
左手の支尾根の末端に着き　急登する。トレールがあったため問題なかったが　なければわかりにくい個所である。（地図「小滝」の破線図通りである。）40分ほど汗をしぼられると　ゆるくなり　左山のトラバースになる。ブナ林に樹氷が付着し、但馬の山を髣髴させ、のびやかな気持ちになる。中谷川対岸の堂津岳の山塊や金山のボリュームのある尾根を振り返りながら支尾根を大きくまくと、荒菅沢への下りとなる。ちょっと嫌なトラバースもある。荒菅沢源頭には、フトンビシを始めとする岩峰群が、岩の黒と雪の白とのコントラストをみせ、聳立している。ここから稜線までの高度差400mを一歩一歩喘ぎながら確実に登る。雑木林を通過した上部200mはナイ

フエッジになっており、一昨日の鹿島槍ヶ岳よりも冬山の雰囲気がただよっている。稜線は強風のため雪煙があがっている。三個コブを過ぎ、80m急登すると大きなケルンのある山頂に着く。頂上は東西に細長い。

高曇のため展望に恵まれ、日本海、海谷山塊（駒ヶ岳、鬼ヶ面山、鋸岳）焼山、金山、白い三角錐の火打山、黒姫山、高妻山、北アルプス白馬岳に続く山波と360度の大観望を得る。帰りは往路を引き返し、荒菅沢で岸本さんにクスラ.リブを御馳走になる。

1月3日（晴）　小谷温泉――中土――糸魚川――神戸.

五竜岳 遠見尾根

小林 利樹

昭和55年1月12日～14日.

1月13日、早朝の神城駅に降り立ち. 五竜スキー場まで20分位歩いて テレキャビン乗り場まで行く。今日は朝から不吉な雪がシンシンと降っている。

これは大分つもるだろうと思いつつ歩く。テレキャビンは. 午前8時から動くとのことで. ここでゆっくり待たされる。テレキャビンは.高くつくが、文明の利器には勝てないようだ。リフトに乗り. 地蔵の頭の少し手前まで一気に高度をかせぐ。このあたりから風雪強く. 視界も10m位となる。シールをきかして 地蔵の頭より少し右手の腹を行く。ゆるやかな尾根を下るとコルにでて、ここから急登である。シールでは正面の灌木帯は直登できず. 右に左にとルートをとる。尾根にでると犬川側に雪庇がでているようだ。

視界が悪いので尾根どうしに進まなくてはいけないし、雪庇にも気をつけなくてはいけない。小遠見山への最後の登りを行くと鹿島槍が見えるのだけれども. 視界3m位までになってきたので 残念ながら見えなかった。

ここから中遠見山へ行く所は右側に雪庇ができている。シールをつけていてもひざぐらいのラッセルである。ワカンであれば大分もぐるだろう。

大遠見付近でテントをはる。風雪強く前が全然見えない。ここまでに4人会っただけである。夜半から雪も大分積もって. テントが大分うまってしまう。このままでは天候の快復ものぞめそうもないようなので明日下山とする。

1月14日、明日も休みだけれども. 今日下山とする方がよいので さっそく下山準備にかかる。雪も大分積って. スキーをはいていても腰位までもぐる所が多く. ラッセルでしごかれる。下りになってもスキーがすべらず頭にきてし

まう。下りでスキーが滑らなければ・どこでスキーをするのだろうか？
視界も10m位だし 地図と磁石を見ながらの前進である。100m位進むのに30分近くかかってしまう。今日中に、ふもとまで降りられるだろうかと心配しつつ 必死でラッセルをする。小遠見から地蔵の頭まで4時間近くかかってしまう。しかし、ここまで来ると もうスキー場であるのでシールをはずし、こけながら下へ降りて行く。ああ！今回は残念であった。しかし、また来ることを思いながら帰途につく。帰ってからニュース等で 今回の連休で八方尾根や遠見尾根で数多くの人々が遭難したと報じていた。天候判断が悪かったようだ。

昭和55年2月8日～11日
ー1月の連休に五竜岳へは行けなかったので今回の連休に再度挑戦．——
2月9日．今日は、朝から快晴である。うれしいことだ。いつものようにテレキャビン乗り場へゆっくり歩いて行く。テレキャビンが動くまで時間があるのでコーヒーを飲み 大阪から来た単独行の人と話をする。手袋を出して椅子に置いて、キジ打ちへ行っている間に スキーヤーが多く来ていた。
もうすぐ動く時間であるようだ。ザックをテレキャビンに入れ、スキーをかついで行く。あっ！手袋を忘れたと思い 椅子の方へ行くと なんと手袋がないではないか！・どうしょう。今回は 軽量にしようと手袋も靴下も予備をもってきてないのに．どうしたらよいだろうか。オーバー手袋だけではどうしょうもないではないか。あたり全部探したが、みつからない。しかたがないので 単独行の人にわけをはなして 手袋をかしてもらう。軽量にするといっても やはり予備はいる。さいさきの悪いスタートであるが、しかし天候がよいので気分をなおして行く。前回、苦労した所も天気がよいせいか楽である。大遠見まで3時間もかかっていないし スキーで登るのは楽しい所である。西遠見と白岳のコルから上部は平川側に大きな雪庇がでている。白岳は、みた感じより傾斜がきつい。3分の2位まで スキーで登るが、これより上部は、クラストしているので アイゼンにはきかえる。これから風が強く立って歩くことができない。しかも天気が思わしくないようだ。
また天気が くずれる兆しが みえてきた。頂上は 細長くなっている。
頂上から少し下って 主稜線と合流して左へ行くと 五竜山荘である。今回は テントがなくツェルトなので少しきびしい．夜半から また天気がくずれてくる。2月10日、風雪強く視界も悪い。しかし、これくらいの天候ならば行けると思い、五竜岳めざして歩む。夏道ぞいに黒部川をトラバースするが

、風が非常に強く顔が痛い。A沢のコルめざして進んで行くが、アイスバーンになっているので注意して行く。G2の頭をすぎると斜度もいくぶんおちているようだ。しかし、ナイフエッジになってくる。頂上直下のコルからが少し悪いようだ。コルから雪壁を登り、小岩壁にあたり　ここより右へ最後の雪壁へトラバースし、雪壁の中を登ると　主稜線のナイフエッジとなる。

視界も悪く、鹿島槍がみえなかった。下りは登る時より注意しながら、五竜山荘めざして降りて行く。白岳の中腹で　スキーをはき、コルをめざしてすべってゆく。しかし、視界が悪いので少し滑っては止まりながらの滑降である。地図と磁石を見ながら行くのは大変だ。大遠見まで来ると　天気も快復してきたので　スキーが楽しく顔面制動をしながら降りて行く。

八ヶ岳、阿弥陀南稜

山本　泰彦

昭和55年3月21日～23日、

メンバー：山本、堀田、

3月21日（晴）大阪（前夜22:20）―塩尻―茅野―学林（8:00）―広河原林道（9:10）―旭小屋（10:00～10:30）―立場岳（13:00）―幕営地（13:45）

茅野駅よりタクシーにてバス停「学林」下車（2,360円）。バス道から右へ直角に折れ、南へ進む。300mほどで弓振川を渡り、野営場の凹阿を右手にみて、巾1mほどの道をたどる。落葉松林の中を赤テープに導かれ、50分も歩くと下りになり　御小屋山、立場岳、西岳を望むようになる。とすぐに原村から立場川右岸につけられた林道（三叉路）に出会う。右手に下り、広河原沢、立場川本谷を渡り　本谷左岸の径を進む。旭小屋手前の堰堤がみえだすが、雪が腐っているため　なかなか近付かない。旭小屋の前を通り、南稜末端近くの鞍部へ登り付く。左に御小屋山、右に西岳を見ながら樹林帯を登って行く。とても暑く下着一枚となる。立場山頂が近くなると南稜の核心部が姿をみせる。P3のガリーがはっきり指呼できる。左手には　霧ヶ峰、蓼科山もみえている。立場山頂上は広々としており幕営適地である。赤岳、旭岳、権現岳、編笠山と南八ヶ岳の代表的な山塊が雪鎧を付け、屹立している。青薙を通過し、少し登った2,430m地点で幕営する。美ヶ原のむこうには、槍ヶ岳、穂高岳が　うっすらとみえている。本日の登山者は、我々だけのようである。

3月22日（吹雪）　　沈澱

3月23日（小雪）幕営地（8:10）――2564m独標（8:40～8:50）――P2（9:50～10:20）～P3取付（10:35～10:50）――P3上部（11:55）――阿弥陀岳（13:15～13:25）――行者小屋（14:10～14:20）――美濃戸山荘（15:30）――美濃戸口（16:15）――茅野――塩尻――名古屋――神戸

うっかりして寝過し、慌てて出発する。昨日の降雪のため、膝から腰までのラッセルを強られる。2564m独標を過ぎると　立場川本谷側へ雪庇が張りだしている。P1，P2とも基部を広河原側へトラバースする。

新雪がベッタリ付着していて、足をのせると崩れるため、慎重に通過する。P2でラッセルから開放され　ホッとする。視界は　朝から変らず約30m。小雪がちらついている。

P3は基部を左へトラバースし、稜に出る。腰まで新雪にもぐりながらさらに広河原側へトラバースし、雪のつまったガリーに取付く。崩れ落ちそうな新雪をかきわけ、スタンスを探しながら登る。2ピッチ目の灌木の手前付近は、ツァッケのかかりが悪く、いやらしい感じがする他は、アンザイレンの必要性を感じないほど登攀容易である。3ピッチ半（つるべ）で稜線に出る。横殴りの風雪のため眉毛が白くなる。平坦な稜線を100mも行くとP4基部に達する。広河原側を10mほど嫌なトラバースし、斜上すると2ピッチ（80m）で阿弥陀岳頂上にとびだす。阿弥陀様が首だけ雪のうえに　だしておられる。視界は以前として30m。中岳との鞍部目指して急降下する。視界が悪く　下方がみえないため慎重に下る。鞍部からは、立派なトレールをたどり、一気に行者小屋へ下る。

樹林の中で一本たて、登攀完了の満足感に浸りながらテルモスの紅茶を飲む。堀田君は　顔に張り付いた氷をはがしている。

柳沢南沢に沿う立派な雪道を一気に下り、美濃戸口よりタクシーの客となる。（2,560円）

参考文献：「岳人」　1976年12月号

八ヶ岳、阿弥陀南稜

堀田　久

今回の山行が僕にとって今年の山行のスタートとなるだけに、3月の八ヶ岳、阿弥陀南稜というのは、ちょうど最適の山であった。夜行列車で塩尻までうたた寝をし、高原列車で茅野、タクシーで学林と初めての八ヶ岳へと向

かった。ふもとは、広々とした高原が広がり、牧地なども多く目につき 南北アルプスとは異った感じの日本ばなれした山域であった。まだ寝ってる足で地図とテープをたどり雪の所々残る道をぽちぽちと誰もいない松林、高原をゆったりした西岳、立場岳をながめながら南稜の取付き旭小屋へと向った。

旭小屋付近から立場尾根の取付きである。登山開始という感じだ。

下部は雪と土のミックスで おまけに暑い。しかし早朝の曇空は好天と変われば快い。中腹からは雪道に変わり かなりの急登の針葉樹の登り一方の尾根だが、この山行の前に3回程 毎週 続けて武本さんと坦馬の山に足を運んでたためか、ヤブこぎをしなくても道が有るし、タコツボもあまりないこの尾根は そういう意味では結構なものだ。上部になると阿弥陀岳が姿を見せた。山腹から見た山々の山容や僕の八ヶ岳のイメージとも異なる岩稜の豪快な山であった。県界尾根がのびている。針葉樹林と鋭い岩峰とのコントラストが画になる。よく写真で見るカナディアン・ロッキーの山に似ている。

マイペースで登ってると そのうち立場山のピークの分かりにくい広い頂上に着き、視界が開け 南八ヶ岳の主な山塊が見わたせた。後、最低コルを少し登った所にPM 1:45に幕営。北アルプスの槍穂まで見える。

翌3月22日は吹雪のため無理せず沈殿。 3月23日、雪がちらつき、ガスっているが、阿弥陀南稜の核心部へと向う。昨日の降雪のため腰までのラッセルがら初まりP1.P2.をガスってるので雪庇に注意しながら通過する。

ルートをあやまらぬよう注意し、一番手ごわいと思われるP3のガリーに取付く。強い風雪のなか 降雪のためワカンで登ってもよいとすら思えるような状態で3ピッチ程で ききの悪いアイゼンで のりきった。次は最後のP4である。ここは、かぶさり気味のちょっとしたトラバースに初まる。ミトンで雪をはらいのけ、足場をよく確め通過。後、2ピッチどんどん登って 次は、どこを登るのかと思ってガスのなか目を凝らすと 凍りついた三角点が有った。あまり実感のわかないまま、中岳とのコルを目指し急降下し、行者小屋まで一気に下る。ここで一服。落ちついてくると なんとなく ほのぼのとした いい気分になってきた。後、登りか降りか分からないような雪道を歩も軽く美濃戸口へと向った。タクシーで茅野へ向うと行きしと違って雪景色。「こいつはいい!」 茅野駅に着いて、山本さんと分かれ 駅においておいたスキーをかつぎ、梅池目指し列車に乗り込んだ。

槍ヶ岳・北鎌尾根 及び小槍

山本　泰彦

昭和55年5月1日～5月3日，

メンバー：萩本、山本、矢木、堀田

5月1日（曇のち小雨）　大阪（前夜22:20）――松本――信濃大町（7:04～7:15）――七倉(7:50)――高瀬ダム(8:55～9:10)――湯股温泉・晴嵐荘（11:15～12:05）――千天出合(14:00～14:20)――支尾根末端(15:15)――P2(17:00)

七倉沢手前でタクシーを降り　山の神トンネルに入る。高瀬川左岸の簡易舗装の道を進み、黒々とした唐沢岳の幕岩を右手奥に見るようになると　高瀬ロックフィルダムである。堰堤につけられたジクザク道を登り、堰堤上に出ると　青紺色の湖面が拡がっている。ここで烏帽子岳への径と別れ　右岸を行く。東沢の先で　自動車道はよく手入れされた山径に変わり、湯俣まで続く。調整池の手前で雪煙をあげている北鎌尾根に初めて対面する。

晴嵐荘前で昼食を摂っていると　いきなり驟雨に見舞われる。晴嵐荘には大阪市消防局の捜索隊が陣取っており、その無線でたった今　北鎌のコルで1名滑落し、ヘリコプターの出動を要請している。（北鎌コルは霧、頂上は吹雪）昨日も独標で2名滑落死し、つい先程、上空を舞っていたヘリコプターが　遺体搬出した由。我々はそうならないだろうと思うものの嫌な感じである。雨も小降りになったので　雨具を付け出発する。水俣川左岸の径は、残雪もあり、桟道が所々かかっている。千天出合手前で吊橋を右岸に渡る。

雨は小雪になっていたのが、急にやむと、頭上に青空が拡がり始める。

天上沢の左岸に渡る吊橋は、朽ちて、ワイヤーだけになっている。渡れそうにもなく、少し川下に一本の丸木橋をみつける。濡れているため　すべりそうで渡るのに手間取る。

P2からの支稜には　明瞭な径がつけられており(多門治新道)、ぐんぐん高度を稼ぐ。稜線の手前に40mの岩場があり、フィクスロープが張ってある。ここでリーダーは用心のため　ザイルを出したが、その必要性は全く感じない。稜線は氷結しており、滑って歩きにくい。アイゼンをつけるのも業腹なので　木の根を握みながら登る。P2手前で幕営にする。

5月2日（晴のち吹雪）　P2(5:00)――P3(6:15)――P4(7:15)――北鎌のコル(9:00)――P8(10:15～10:35)――独標(11:40～12:00)――北鎌

平(15:00)

昨晩、降雪があったので 樹々は雪を被っており、積雪期にふさわしい景色となる。幕営地から一登りでP2である。少し登ると 左手奥にP5．P6の岩峰が聳立している。P3は雪のクロアールを中ほどまで登り、左へトラバースし、岩のリッジを登る。P4へは稜線慢歩である。右手に硫黄尾根がその特徴ある鋸歯をみせている。振返れば 裏銀座、後立山の山々が白衣を纏っている。行手正面にはP8の上に独標がちょっぴり頭をだしている。

P4．P5のコルから天上沢側をトラバースし、雪壁を80mほど直登するとP5、P6のコルである。鹿島槍が 高瀬川の真上にみえている。ここからP6北峰の岩壁基部を天上沢にトラバースする。雪がもう腐り始めており、ちょっぴり嫌なところである。トラバース後、雪壁を50m直上し、北峰、南峰のコルから 千丈沢側を斜上するとP6である。この登りは氷結しており、アイゼンが小気味良く喰い込む。P6からP7を過ぎ 北鎌のコルまでは下り気味のナイフエッジになっており、昨日の遭難場所かと思うと少し緊張し、慎重に通過する。千丈沢側の雪壁を登り、雪稜をたどるとP8の頂上である。ここで独標が初めてその全容をみせる。登攀中の先行者が良くみえる。ものおじない小鳥が すぐ近くまで寄ってきて 心をなごませる。

P9を過ぎ、雪洞のある最低コルから独標の登りになる。天上沢側のルンゼを10mほど直登すると、あとは雪稜歩きで、あっけなく独標に着く。大槍の左肩に前穂、北尾根がのぞいている。P11からP13までは、天上沢．千丈沢側の容易なトラバースを繰返す。しかし、不調者がでて、牛歩から蝸歩になる。天候が下り気味なのでイライラするが 滑落すれば確実に天国行なのでやむを得ない。P14は天上沢側のちょっとした岩場を登る。P15は千丈沢側をトラバースして、雪壁を50m直上する。このあたりから、横殴りの吹雪になったので、時間は早いが 北鎌平で幕営にする。夜は星がまたたき、先刻の吹雪が嘘のようである。

5月3日（快晴）北鎌平(7:00)——槍ヶ岳頂上(9:00～9:35)——槍ヶ岳山荘(9:50～10:00)——小槍基部(11:00)——小槍(12:00)——槍ヶ岳山荘(14:10～15:00)——赤沢岩小屋(15:50～16:20)——横尾(18:00～18:20)——上高地(20:30～20:45)——松本(21:50～22:14)——大阪(5/4.5:49)

本日も天気良好、五月の連休にしては まったくついている。大槍を越えるだけなので遅い出発となる。左手より天上沢側の雪壁を登り、チムニー状の露岩の手前で ザイルをつける。「毎年、この登りで数人の遭難者がでてお

り……」と、文献に書かれるとザイルをついだしたくなるのが人情であるが、その必要性は感じられないほど容易なチムニーである。1ピッチ登り、岩の基部を左にまわりこむと頂上である。湯俣の調整池が独標の彼方にみえている。槍の肩で一本たてた後、萩本と山本は小槍に向う。大槍～50m登り、千丈沢側～雪渓を80m下る。曽孫槍基部をトラバースし、小槍の基部にでる。ここから10m直上し、曽孫槍と小槍との鞍部にでる。1927年8月26日故秩父宮殿下、槙有恒氏一行が登攀されたクラック.ルートである右ルートを登ることにする。萩本さんトップで僕がビレーする。ビレーしていると雪まじりの強風が吹き抜け手足がしびれる。8mほど稜角を登り、左へトラバースして幅広いクラックに入る。クラックにはチェックストーンが2ヶあり、氷が付着している。クラックの外には、小さいがしっかりしたホールド，スタンスがある。しかし、アイゼンに手袋では、今までの雪壁とは勝手が違い戸惑う。クラックを斜上するとバンドにでる。ここには残置シュリンゲがたくさんある。左へバンドを伝い直上すると小槍の頂上でケルンがある。風が強いのでたっていると吹きとばされそうになりアルペン踊りどころではない。大槍からの見物人が3人、こちらを見ている。懸垂下降するため、ザイルを投げたところ、末端部を風に北側へもっていかれ、尖った岩角にからまり、その修正に手間どる。元の鞍部へ懸垂下降し、往路を引返す。槍ヶ岳山荘の前で休憩していると山内君に声をかけられる。

聞けば朝4時に北鎌尾根末端を出発し、今到着したとの由。川辺、山内両君と一緒に槍沢を下り赤沢岩小屋でアイゼンを外す。赤沢岳のハングした岩場が美しい。槍沢ロッジ前で山径にでて、横尾までとばす。横尾付近は残雪がわずかにある程度で河原の石がむきだしになっている。横尾で幕営する川辺、山内両君と別れる。明神岳左肩の星が梓川の川面に映っているのを見ながら、暗くなった径を上高地へ急ぐ。

参考文献：
北鎌尾根：岳人 1970年4月号
小槍　：岳人 1968年8月号，藤木九三著「雪、岩、アルプス」
小槍

続.但馬の山々

高畑山 (983.8m)

山本　奉彦

昭和55年1月6日.　　メンバー：山本.大川.(酒井)

1月6日(曇)　神戸――姫路――生野(9:53)――宮ノ谷堆積場(10:20～10:35)――谷の入口(11:05)――稜線(11:45)――高畑山(12:15～12:50)――稜線を離れる(13:00)――谷の入口(13:20)――生野駅(14:20)――神戸

高畑山は市川の支流である猪篠川,越知川、白口渓谷に三方を囲まれた山塊の盟主である。標高こそ東方のチケ峰、西側の暁晴山にわずかに劣るものの、その膨大な山容には以前から注目していた。

生野は雪である。正月の鹿倉部落が黒い地肌を見せてたのとは対照的である。生野の町を南へ抜け、国道312号線が宮ノ谷を渡る手前で、北真弓の越年神社の境内に入る。境内の右手の林道を東へたどる。10分も歩くと林道は二手に別れる。直進する道は宮ノ滝不動尊の行場を経て不動尊へ、左手の山腹を行く道は直接、不動尊へ行くものである。ここでは山腹道をとる。ハングした岩の下に立派な祠がある。「立入禁止　宮ノ谷堆積場」の立札のある柵を越え、宮ノ谷ダムの右岸上部に出る。このダムは生野鉱山のズリ石を堆積してできたダムである。ダムの右岸は巾1mの巡視路である。

ダムを半周すると沢の入口で、この道は小径となり、左岸に渡る。

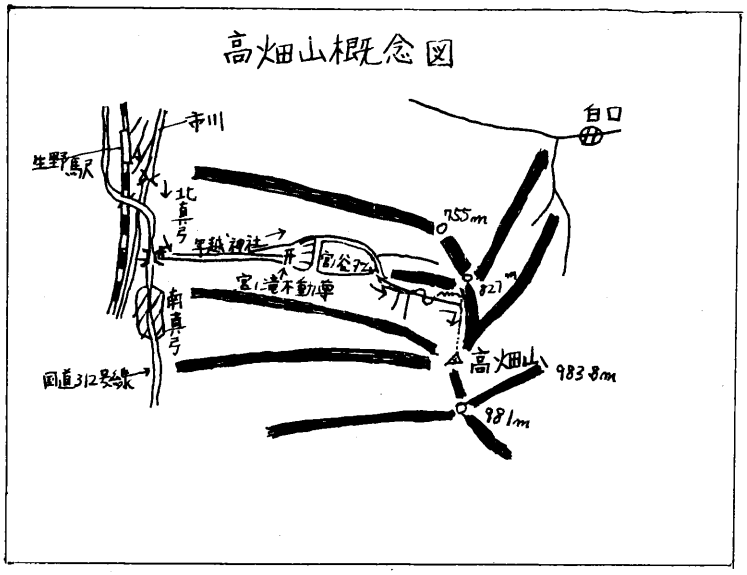
右手よりの小沢を2本横切ると右岸に渡る。すぐに左岸に渡り、沢の源頭で右へ横切ると植林に出る。植林の中を電光形に80mも登ると稜線の鞍部に出る。827m独標から50mほど山頂に寄った地点である。

頂上は霧氷の樹林で武装している。　稜線の踏跡径を忠実にたどり、低い笹のジュウタンをひいた頂上に着く。頂上は約50坪の広さで、休憩用の岩もある。30cm程の積雪であったが運良く三等三角点標石を探し出す。

視界は約2Km,幸じて宮ノ谷ダムが見える。チケ峰も暁晴山も雲の中でみえない。気温は氷点下になっているのだろうか、手が赤くなり痛い。

しかし、テルモスのお茶を飲み、のんびり昼食を摂る。

白口部落へ下る予定であったが、75才の酒井さんに敬意を表して往路を戻る。



東山（1015.9 m）

山本　泰彦

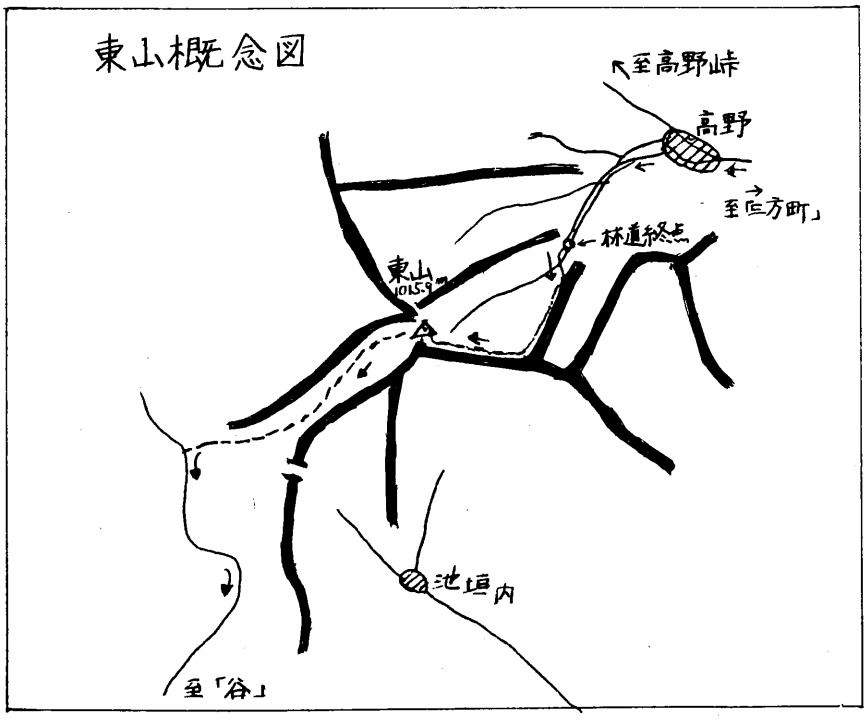
昭和55年1月19日.　　メンバー：山本．堀田

1月19日（曇）　神戸――姫路――曲里――三方町（9:50）――高野（10:10～10:25）――稜線（12:00）――昼食（12:20～12:40）――東山（14:30～14:50）――林道（16:10～16:20）――谷川、栗ノ木橋（16:55）――バス停、谷橋（17:10）――山崎――姫路――神戸

姫路8時発取鳥行特急バスに乗り、曲里で横山行に乗り換え、三方町下車。高野部落への道は雪が付いている。部落にはいり、カーブミラーのある三又路で左に折れる。入母屋の立派な家が多い。家が途切れたところで東山頂上直下にはいっている谷へ林道がつけられているのをみつける（右岸）。

積雪は30cm近くもあるので身仕度をする。300mも進むと不動滝への道を右手へ別ける。橋を渡り、林道をそのまゝ進むと右斜面が伐採されている地点で林道終点となる。そのまゝ左岸を200m進むと岩があり、この付近で積雪のため径が不明となる。倒木に雪がかぶさり、谷沿いは歩きにくいので右岸の桧林を直登し、最後は萩を別けて頂上から真東に派生した稜線にでる（750m付近）。稜線を少し進むと展望がひらけ、南北に長い

頂上と初めて対面する。三角形状の一ツ山（1064.4 m）が北方にみえる。
自分の呼吸の音が聞こえるだけの静寂の世界である。
稜線は、膝から腰までくらいの積雪がある。新雪のため、靴が下の倒れた笹に当るまで完全にもぐるので歩きづらい。雑木が密生していないのがせめてもの救いである。950m付近から平坦となるが、雪に足をとられ、遅々として進まない。鹿であろうか、間隔が2mもある足跡が点々と続いている。20mほど下って ひと登りすると頂上の一角に出る。北へ150mも行くと測量櫓（点名「上野」）がある。雪をかきわけ2等三角点を確認する。櫓にあがると東に暁晴山、千町ケ峰、西に植松山がよくみえる。
今までのラッセルの苦労がむくわれるというものだ。
頂上から真西へ100mも下ると伐採跡に出る。沢は深雪と倒木で歩きづらいので山腹を沢に沿って下る。水が流れ始めた所で沢通しに下るが、岩にうすく氷がはりつき、歩きにくい。やがて 沢沿いに小径が現われたのでそれをたどる。沢が本流に合流した地点で林道に出る（540m）。
ここは 谷部落から「谷川」を通り、池垣内への破線路（地図，安積）が分岐している地点である。雪の林道をどんどん下り、谷の集落を抜け 引原川を渡るとバス停「谷橋」である。



赤谷の頭(1216.4m)～三室山(1358.0m)

山本　泰彦

昭和55年3月8日～3月9日，メンバー：山本，堀田

3月8日（快晴）神戸――姫路(8:00)――戸倉(9:50～10:00)――戸倉スキー場，886m(10:30～10:50)――赤谷の頭(13:10～13:30)――1087m(14:35～14:55)――1191.6m三角点(16:00～16:20)――1130m幕営地(17:00)

兵庫県と鳥取県との県境尾根には、加藤文太郎氏が兵庫アルプスと呼んだ山々が訪れる人も稀で．ひっそりと孤高を誇っている。小生は以前．積雪期に赤谷の頭と三室山は登ったことがあるので．今回はこの二山の縦走を試みた。姫路から鳥取行の特急バスに乗り、戸倉で下車。前回は戸倉峠から登ったので．今回は戸倉部落から直接登ることにする。無人の戸倉スキー場の中をテクテク登る。（国鉄のスキー場便りでは積雪50cm）スキー場上部で赤谷の頭から東へ戸倉スキー場に至る長い尾根に取付く。すぐに40m下り、少し返して、ワカンをつける。雑木林で左側は所々、伐採されており、赤谷の頭から南々東へ派生した長大な尾根が望まれる。雪庇もあり、小さなコブを忠実に越して行く。傾斜がきつくなり、雪にもぐり易くなると県境尾根に達する。引原川を隔てて．2年前に縦走した藤無．三久安．阿含梨の山々がまず目につく。荷をおいて．北西へ200m進むと赤谷の頭に達する。

三角標が2mほど雪の上に頭を出している。頂上は樹木もないので360度の大展望が得られる。氷の山、妙見山、東山、沖ノ山等十指にあまる山々がその特徴ある姿をみせている。これから向う三室山は．はるかに遠い。

ザックをおいた所から南へ200m進むと．右手に大きなブナが2本ある。

その間を右へ直角に下る。標高にして50mも下ると やせた尾根になる。鞍部から1180m独標へはブナ林の中のゆるい登りである。平坦な尾根をやや右よりに歩き、左へ急に下って少し登ると1087m独標である。ここで大休止にする。昨晩、戸倉峠で幕営したという姫路の4人パーティにここから先行してもらう。次の1166m独標は50mほどの登りである。ここで さきほどの姫路のパーティを追い抜く。ここからは、やせた尾根になり．杉の原生林もある。左へカーブすると、1191.6m峰で、北面の展望が急に開ける。
赤谷の頭が遠くになり、歩いてきた尾根が蜿蜒と眼下に拡がる。

縦走の喜びをかみしめる一瞬である。登山者があるのか、足許の木の枝に赤布がつけてある。南西方向に巾1mぐらいの切開きがあり、三室山が白く

ピラミダルな山容をみせている。50m戻り、真西へ下り、次のピーク1130m付近に幕営する。

3月9日（雨）　1130m幕営地(6:40)――1202m独標(8:00～8:10)――1170m鞍部(9:50～10:00)――三室山(11:20～11:30)――水道ポンプ場(12:50)――キャンプ場管理事務所(13:15～13:40)――千草――山崎――姫路――神戸

一晩中、木々の枝が風に唸っている。暁方、テントをたたく音がするので霰かと思いきや、大粒の雨である。たたきつけるような雨で、雨具のフードで顔をかくしながら歩く。1191.6m峰で幕営した姫路のパーティは縦走を断念したのか　ついてこない。もっともあのペースでは我々に追いつくのは無理だろうが。1047m鞍部まで下り、さらに2ヶコブを越して、ブナ林を登ると1202m独標である。「昭和46年4月　鳥取大W.V.」の標識がある。

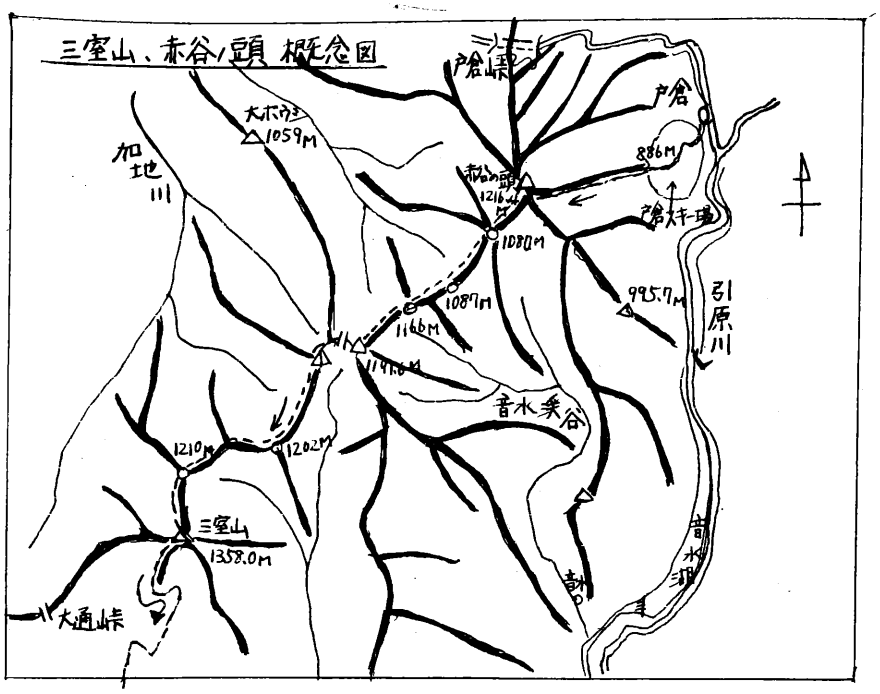
ここから真西へ下る。最初は急であるが、すぐ尾根はだだ広くなり、悪いことには視界が20mしかきかない。次のピークで真南に折れ、50m進むと今度は南西へ向きを変える。雪に押さえつけられた根曲竹の根元が空洞となっているのにはまりこむと、股まで雪にもぐる始末で、時間がどんどん過ぎていく割には、距離が伸びない。しかも音水側から吹きあげてくる雨は、いっこうにおさまる気配もない。1210mピーク手前から根曲竹が所々雪の上にでており、難渋する。1200mのコブを過ぎると三室山への急登が始まる。

ブナの大木の単列を目印に起き上った根曲竹を避けながら進む。少し尾根の右寄りに歩いているせいか風がおさまり、ほっとする。腐った雪に時々、股までもぐり　消耗が激しい。三室山頂の東100mの地点に飛びだすと再び風雨が見舞ってくれる。三室山はこれで3回目であるが、前の2回(S48.3.3とS50.1.2)のいずれも吹雪であった。よくよくついていない山である。

記念写真を撮り、早々に三室高原へ下山することにする。頂上から南へ100m進み、そこで右手へ直角に折れ、支尾根にはいる。急な尾根を右寄りに下ると大岩に出会う。さらに松林の中をたどると、露岩があり、ここで左へトラバースする。植林の中のジグザグ径を下るとやがて沢沿いの径になる。

水道ポンプ場で林道に入り、キャンプ場の左手を通り、無人の管理事務所で休憩する。この付近は地膚がむき出しで、稜線の積雪が嘘みたいである。

燗鍋滝付近で釣り人をみかける。河内部落で千草へ行くという親切な御夫婦に千草のバス停まで送ってもらう。笛石山と植松山が山水画のように小雨にけぶっているのが印象的である。



朝来山(756.5m)～青倉山(810.5m)

山本・泰彦

昭和55年3月15日，メンバー:山本、堀田

3月15日(曇)　姫路(前夜21:16)――但馬竹田(前夜22:54～7:40)――立雲峡登山口(8:00)――駐車場(8:15)――愛宕神社(8:50～9:00)――林道(9:10)――稜線(9:30)――朝来山(10:05～10:30)――684m独標(11:00～11:10)――伊由峠(11:40～12:10)――620m独標(13:00～13:10)――青倉山(13:40～14:05)――青倉神社(14:25～14:40)――川上(15:10)――青倉駅(16:10～16:44)――姫路――神戸

竹田駅で仮眠をとり、のんびり出発する。山東町迫間への道を行き、老人ホーム「立雲荘」を過ぎる。材木置場の先で右手へ簡易舗装の道が山へはいっているので、それをたどると15分で立雲峡の駐車場に着く。立雲峡は桜の名所であるが今はその時期ではない。桜見物のための遊歩道を進むと三叉路になる。愛宕神社へは左手の径をとり、約10分歩き、右へ30mほど入ると、大岩の前に社がある。(三叉路の右手の径が一番しっかりしているが、桜見物の径である。)もとの径に戻り、そのまま進むと　迫間からの林道に出、

会う。右へ5分で林道は終点である。小径があるので、それをたどるが、すぐに廃道となる。藪潜ぎして　稜線に達すると、踏跡らしきものがあり　歩き易くなる。樹木についた雪が降りかかり濡れる。頂上付近の北面は伐採されているため展望良好。足許に展開する円山川に沿う竹田の町並と竹田城址が美しい。その背後には建屋山、大倉部山、氷ノ山も望見される。

昭和53年6月15日設立の測量櫓にのぼると、東方に栗鹿山も良くみえる。頂上から東へ200m進むと、北へ町境沿いに下っている登山道がある。(林道と出会ってから我々は右へ行ったが、左へ行くと　この登山道の入口があるのではないかと推定される。)そのまま稜線を684m独標へ進む。

頂上からこの独標までは径があり、青倉山、栗鹿山を樹間越しにみながらの稜線散歩である。684m独標の南面一段下った所は良き展望台である。

ここから右へ踏跡に入り、伊由峠目指して300mばかり急降下する。猪公のヌタ場が散見される。伊由峠はススキが茂り、荒れた峠である。

栗鹿山が額縁にはめたように見えるのが唯一の慰めである。昼食後、20mほど東へ下った地点から尾根に取付く。雑木林で下生えもなく、歩き易い。570m付近は少し悪いが、伊由谷側に踏跡がある。620m独標を過ぎると再び径は良くなり、ちょっとした急登の後、反射板のある頂上に飛びだす。

東面、南面の展望が得られ、栗鹿山、三国岳、千ケ峰、行者山、段ケ峰の山々が指呼できる。それに反し、黒川部落の奥にできた揚水ダムの水造湖工事のため周囲の山肌が削られているのが痛々しい。青倉山から青倉神社へはハイキング道が通じている。青倉神社、奥の院に詣でる。次のピークを登り、急に下った鞍部で右へとり(左へ行くと黒川部落へ行く。)沢を横切ると青倉神社である。こんな山奥にと驚くほど立派な社殿である。眼病に霊験があるといわれ(社殿裏の流水にホウ酸が含まれているためらしい。)、信者のための宿舎も建っている。兵庫県ではめずらしい立派な杉並木の参道を川上部落へ。川上からは田園風景をめでながら、伊由谷川に沿って歩く。納座付近で雨にふられる。伊由市場にある大きな青倉神社の石の鳥居(昭和24年建立)をくぐると青倉駅は近い。

神戸山岳会・会報　№10

昭和５５年１２月　発行

編集者　堀田　久・国沢昭美

発行者　神戸山岳会

神戸市中央区中山手通１丁目１０５の９

（前田浩方）

印刷所　神戸市中央区北長狭通４丁目私学会館内

甲南出版社

神戸山岳会、会報 No.10 正誤表

ページ	行	誤	正
2	5	現状の会の情況	現在の会の情況
	11	小林(装備、)	小林(装備,
	13	山本(SL,装備)	山本(SL,装備)
	16	(内3日間予備日)	(内3日間予備日)
4	14	傾針がきついので	傾斜がきついので
	24	神田氏の巧みなルート	神田氏の巧なルート
	30	ありますようにと、ここから	ありますようにと祈る。ここから
5	32(最後)	、少しその堺がみえ、	、少しその境がみえ、
6	15	全員8人で	8人全員で
	16	…本峰より、急登を下る。	本峰より、急に下る。
	19	最後の急登は、	最後の急な下りは、
	23	契茶店でトースト	喫茶店でトースト
7	14	天気は快晴、雪積は	天気は快晴、積雪は
	19	雪積は此処でも	積雪は此処でも
	23	幕営の準備にかかる。	幕営の準備にかかる。
	25	明日の気床を	明日の起床を
8	15	20センチ程の雪積量	20センチ程の積雪量
	18	此処からの降りの急斜面	此処からの降りの急斜面
	20	山行は雪積量が	山行は積雪量が
	21	ラッセルする期会	ラッセルする機会
	30	それが当着する迄	それが到着する迄
	33	絵に書いた	絵に書いた
9	8	通過する傾から	通過する頃から
	24	嘘のよう、初日が	嘘のよう、初日が

ページ	行	誤	正
11	10	山と溪谷	山と渓谷
13	18	全装備を	全装備を
	19	白出沢までは担々とした	白出沢までは但々とした
	25	凄味があり、表現しがたい魅力	凄味があり、表現しがたい魅力
	29	傾斜も	傾斜も
15	10~26	11/25 …… かんぱい!!	全文を16ページ最下行へ
	15	(氷の状態がもろくて	(氷の状態がもろくて
16	15	晴れ間が見えます。	晴れ間が見え出す.
17	13	荘の前で積雪のため	荘の前で積雪のため
19	19及び22	予備	予備
	26	みた感じより傾斜が	みた感じより傾斜が
20	2	斜度もいくらぶん	斜度もいくぶん
21	17	斜上すると	斜上すると
22	7	急登の針葉樹	急登の針葉樹
	8	坦馬の山に	但馬の山に
	12	針葉樹林と	針葉樹林と
	23	トラバースに初まる。	トラバースに始まる.
	25	凍りついた三角点が	凍りついた仏様の頭が
26	25	幸じて宮ノ谷ダム	幸じて宮ノ谷ダム
27	13	右斜面が伐採	右斜面が伐採
29	8	ひっそりと弧高を	ひっそりと孤高を
	14	少し返して	少し登り返して
	16	傾斜が	傾斜が
	29	1191.6m峰で	1191.6m峰で
裏の見返	発行者の住所	神戸市中央区中山手通1丁目105の9	神戸市中央区中山手通1丁目6-21

川崎重工業株式会社
A4 明光塗料 オ②